

実り多き白秋、凜とした厳冬への予感

三島正英教授への送別の辞

社会福祉学部准教授 大石 由起子

山口女子大時代から40年に渡り、本学で発達心理学の教鞭をとってこられ、また1998年の社会福祉学部長就任にはじまり、大学院健康福祉学研究科長、附属地域共同研究センター(現地域共生センター)所長と歴任され、2006年からは公立大学法人となった山口県立大学の副学長として2011年12月まで、長きに亘り大学改革、運営に携わってこられた三島正英先生がこの3月で定年退職を迎えられます。2005年より10年間、隣の研究室で臨床心理学を担当してきた者として僭越ながら送別の辞を贈らせていただきます。

三島先生から、「青春、朱夏そして白秋へ 一心理学徒のたどった心の旅」と題する論文を読ませていただいたのは、秋のことでした。そのあとで先生の研究領域についての話を改めてお聞きしました。

1. 研究テーマー対象の永続性 (object permanence) ーについて

先生のご研究の出発点は、ピアジェによって提唱された、乳児の「対象の永続性」の獲得というテーマですが、これは臨床的にも大変興味深い事柄です。例えば「いないいないばあ」という遊びが赤ちゃんに驚きをもって喜ばれるのは、赤ちゃんが、「視界から消えたモノは、もはやそこに存在しない」という認識にある時です。「いないいないーい」と両手で隠された顔が、「ばあ！」と現れるのは赤ちゃんにとって、まさに顔が消えたり現れたりするマジックなのです。しかしやがて「見えなくなっても、そこにモノは存在する」という対象の永続性の認識を獲得した子どもにとって、「いないいないばあ」は大人が「手で自分の顔を覆って隠したり見せたりしているだけ」で不思議でもなんでもないことと見做されるようになります。その認識は、愛着行動としてお母さんを後追いする赤ちゃんが、お母さんがトイレのドアの向こうに消えた途端、火がついたように泣くのに対して、対象の永続性を獲得したお姉ちゃんの方は「だいじょうぶ、ママはトイレに入っているだけだから」と慰めるという反応の違いを生むのです。そしてこの認識はやがて、幼児が幼稚園や保育園に行く段階で、「お母さんはここにはいないけど、お家にて私の帰りを待っていてくれる。」「お母さんは今はお仕事に行っているけど、夕方きつと迎えに来る」「お母さんはここにはいないけど私の心の中にお母さんの笑顔がある、だから大丈夫」というボウルビイのいう「対象の内化」につながっていくと思われれます。

若き日の三島先生は、「いつ頃赤ちゃんは、見えなくなってもモノは存在しつづけるという認識 (object permanence) を獲得するのか」その発達の時期を保育園の赤ちゃんに関わりながら研究しておられたのです。

2. 大学運営へといざなわれて

その後、1975年に山口女子大学に助手として赴任され、家庭を持ち、論文を学術雑誌に掲載され、

米国留学を経て、博士号を取得し教授就任と、研究者の途を順調に歩み始められました。しかし、その後の社会福祉学部の新設や共学化した山口県立大学への転換という一連の改組の流れの中で、次第に大学運営へと関わる途に引き込まれていかれました。それは先生の意志というより、場の要請からやむを得ずという始まりであったようです。

私が山口県立大学に着任したのは2005年、法人化を翌年に控えた年でしたが、その時三島先生は独立行政法人準備室長になっておられました。一見、強面の風貌で貫録がおりでしたが、話をすると繊細な感受性と細やかな観察眼を持っておられることに驚きました。法人化に向けて、私は学生支援のワーキンググループの中で、学生のメンタル支援を行う学生相談室の構想を担っていました。その後現在に至るまで学生相談に関わってきましたが、三島先生は何かある時には相談に行ける大きな存在でした。大学はどうあるべきか、学生にとってどのような大学であるべきかといった大局的な見方を先生との対話の中から学びました。困っている状況を相談に行き、こちらが考えていること、その根拠について稚拙ながらも伝えると、実にしっかり聞いてくださる方でした。また、このようにやっていきたいというこちらの意図や熱意を汲んだ上で、ご自分の判断をきっちり伝えてくださる方でした。甘くはないけれど、正面から向き合ってください人というのが三島先生についての、私の率直な感想でした。

それともうひとつ、折にふれ三島先生の中に、山口女子大学、山口県立大学に対する思い入れ、というよりもむしろ深い愛情を感じることがありました。私のような教員が自分の周辺のことしか考えられない中で、先生は教育の場、研究の場としてこの大学が如何にあるべきかを義務的にではなく、愛情をもって考えておられた数少ない人であったのではないのでしょうか。先生の強面の風貌に怖けることなく、対峙することのできる信念や考えを私たちはもっと持つべきだったのではないのでしょうか。

3. 団塊の世代の後を引き継いでいく後進として

社会福祉学部は今年度、定年退職される4人の先生方を見送ります。団塊の世代にあたる先輩方が職場を去っていかれる中で、残された私たちは、心もとない思いとともにしっかりしなければという緊張感を感じています。三島先生に今少し大学に留まってこの大学の行く末を見届けていただきたいと願うことももう叶いません。

しかし、「やがて対象は内在化され、その人のこころの中に存在するようになる。」そのように私たちも、三島先生の存在を心に刻むことでしょう。そして私たち自身が、学生にとってそのような存在になれるよう精進していきたいと思っております。

それこそが、先生の本学における多大な功績とともに、実り多き白秋へと繋がっていくものではないでしょうか。

そして、もっとずっと先に、凜として厳冬を迎えられる先生のお姿が目に見えよう。